



4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) うんしゅう みかんの生 産対策</p>	<p>(今月の作業のポイント) ○うんしゅうみかんの生産対策 ○キウイフルーツの人工受粉 ○病虫害防除</p> <p>5月はかんきつ類、キウイフルーツやかきなどの開花期であり、着花管理に重要な時期であるため、気象情報に注意して計画的に作業を行う。</p> <p>ア 芽かき 本年は、着花の少ない樹が多いと予想される。この場合、新梢の発生が多く、花と新梢間の養分競合が起こり、生理落果が助長される。結実率を高めるために着花を確認後、着花部位周辺の芽かきとかぶさり枝を除去し、花に光を当てて養分競合を防ぐ。</p> <p>イ 摘蕾 着花の多い樹では、側枝単位で摘蕾を行い、新梢を発生させる。摘蕾は蕾が膨らみかけて開花するまでが適期であり、遅すぎると新梢の発生が悪くなるので、直花が団子状に着いた、極端に花の多い樹から行う。</p> <p>ウ 液肥の葉面散布 貯蔵養分が不足している樹の樹勢の回復と、健全樹においては新梢の充実、果実肥大促進を目的として、開花前に窒素主体の液肥を数回、葉面に散布する。</p> <p>エ 夏肥の施用 5月は地温の上昇に伴って根の活性が高まり、肥料の吸収効率が高まる。夏肥は樹勢の維持、果実肥大、新葉の充実を図るための大切な肥料であるが、施肥量については、今年の着花状況に応じて調整し、普通温州では通常に着花状況であれば、10 a 当たり窒素成分量で5 kg程度を5月下旬に施用する（愛媛県施肥基準）。</p>

項 目	作 業 内 容
(2)キウイフルーツの人工受粉	<p>人工受粉は、結実安定や大玉生産のために欠かせない作業である。雌花の受粉能力は開花当日～1日後までが高く、その後は低下することから、開花後直ちに雌しべの柱頭部にしっかりと花粉が着くよう受粉する(写真1)。受粉中や受粉後の降雨は受精に影響するため、悪天候時は受粉を控える。</p> <p>液体増量剤を利用した液体受粉は、作業時間が梵天受粉の45%、機械受粉の70%程度の処理時間となり、多少の雨でも従来の粉末受粉と同等の効果が得られることから、経済性、作業性の面で有効である。ただし、受粉効果の実証されたヘイワードを中心に利用する。</p>
(3) 病害虫防除	<p>ア かんきつ類</p> <p>(ア) かいよう病</p> <p>5月は越冬病斑からの病原細菌の流出量が多く、新葉や果実への感染の危険性が高い時期であることから、開花前と落弁直後にICボルドー66D 80倍(パラフィン系展着剤加用)やムッシュボルドーDF 1,000倍(炭酸カルシウム剤加用)等の散布を行う。また、罹病枝葉(特に夏秋梢)を除去するとともに、風雨による感染を防ぐため防風ネットや防風垣を整備すると良い。</p> <p>(イ) 灰色かび病</p> <p>開花期の前後に降雨や曇天が多く、低温多湿な気象条件になると多発する。本病に感染した花弁が接触することで果実に傷が生じるため、花弁の落ちにくいうんしゅうみかんや清見などで被害が多い。防除は満開期から落弁直後にスイッチ顆粒水和剤3,000倍やファンタジスタ顆粒水和剤4,000倍などを散布する。</p> <p>(ウ) そうか病</p> <p>伝染源となる病原胞子は多湿条件で形成されるため、降雨が続くと発生が多くなる。また、日当たりが悪いなど湿度の高い園地では発生しやすい。葉や果実、枝に感染し、病斑上にまた新しい胞子を形成して二次感染を繰り返す。愛媛果試第28号(紅まどんな)も発生に注意が必要である。薬剤防除は、落弁期にナ</p>



写真1 液体受粉後の雌花

項 目	作 業 内 容
	<p>リア WDG 2,000 倍やファンタジスタ顆粒水和剤 4,000 倍などを散布する。</p> <p>(エ) 訪花害虫 主な加害種はケシキスイ類とコアオハナムグリで、吸蜜時に果実になる部分にツメでかき傷をつける。防除は、飛来数が多くなる前の2～3割開花時にエクシレルSE 5,000倍やオリオン水和剤40 1,000倍などを散布する。</p> <p>(オ) チャノホコリダニ (写真2) 常発園や前年の発生園では落弁直後(5～10日後)に、サンマイル水和剤3,000倍やフロンサイドSC 2,000倍などを散布する。</p>  <p>写真2 チャノホコリダニの被害果</p> <p>イ 落葉果樹</p> <p>(ア) キウイフルーツ花腐細菌病 本病の病原菌は雨によって飛散し感染する。感染は、萼の裂開期頃が最も多く、萼が割れてから開花の間に雨が多いと発生が助長される。そのため、開花前の5月上～中旬にアグリマイシン-100の1,000倍などを散布する。また、開花約30日前に、主幹部に環状剥皮処理(5mm幅)することで発病抑制に効果がある。しかし、環状剥皮は、樹勢低下などを招く恐れがあるため、樹勢の弱い樹や発病の少ない園、キウイフルーツかいよう病の発生が懸念される園では処理しない。</p> <p>(イ) キウイフルーツかいよう病 (写真3) 感染や被害の拡大を防ぐため、銅剤等による薬剤散布を徹底する。新梢伸長期から開花期にかけては感染リスクが高いため、重点的にモニタリングを行い、発病の早期発見に努める。樹液の流出、新梢の枯死といった症状が確認された場合には、症状が</p>  <p>写真3 葉の褐変症状</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>確認された部分を切除する。</p> <p>(ウ) かき炭疽病 本病は枝や幼果、成熟果および葉柄に発生し、発病部分には雨が降った後に鮭肉色の塊状胞子が見られる。新梢発育期となる5月には、ジマンダイセン水和剤 600 倍などを散布する。病斑上の胞子から二次感染するため、発病枝は早期に除去する。</p>

(作成 果樹研究センター)